

# 外国人ケアワーカーのための介護福祉士国家試験対策講座 — 鈴鹿市における事例報告 —

## National Care Workers Examination Preparation Course for Foreign Care Workers: A Case Report in Suzuka

棧敷 まゆみ\*  
Mayumi SANJIKI

### 要 旨

本稿は、地域在住の外国人ケアワーカーを対象とした「介護福祉士国家試験対策講座」の事例を報告、評価し、本講座が受講者の学習基盤となっていること、受講者が自分で学習を進めていけないこと、漢字の読み方や言葉の意味で学習に苦勞していることなどを明らかにする。これらを踏まえ、本講座では介護の専門科目等について講義するだけでなく、漢字・言葉の学習や学習方法についても指導し、最終的には受講者が自律的に学んでいけるよう支援すべきだと考える。

キーワード：外国人ケアワーカー，日系ブラジル人，介護福祉士国家試験，  
学習者オートノミー，エンパワーメント

### 1. はじめに

近年、少子高齢化による要介護者の増加や介護職における慢性的な人手不足等の打開策として、看護・介護分野への外国人労働力の投入が検討されている。すでにEPA（経済連携協定）に基づく外国人看護師・介護福祉士候補者（以下、EPA候補者とする）の受入れが平成20年より始まっており<sup>1)</sup>、看護・介護の現場で働く外国人が増加している。

鈴鹿市及び近隣地域では、平成20年のリーマンショック以降、就労制限のない日系人を中心に安定した職を求め、介護職を希望する外国人住民が増えている。実際、四日市市の社会福祉法人青山里会では、全介護職員の1割程度となる約60名の外国人介護職員（以下、外国人ケアワーカー<sup>2)</sup>とする）が働いている。

現在、外国人ケアワーカーの多くは、ホームヘルパー2級をはじめとする様々な資格で働いているが、介護福祉士国家試験（以下、国家試験とする）の受験資格（実務経験3年

---

\*本学講師、日本語教育(Japanese Language Teaching)

以上等)がありながら、試験科目の難しさや日本語の問題などで受験を諦めている人や、独学で勉強するも合格ラインに達せずにいる人が少なくない。

介護福祉士国家資格の取得は、外国人ケアワーカーの処遇改善(賃金の上昇、正規職員化、社会的地位の獲得等)はもちろん、外国人ケアワーカーが社会的に意義のある仕事にやりがいを見出すことにもつながると考えられる。外国人ケアワーカーが雇用面、精神面で安定すれば、より誇りを持って仕事に励むことができ、介護サービスの質の向上も期待できる。そうなれば、介護サービスの利用者も安心してより質の良い介護サービスが受けられるだろう。来たる超高齢化社会において、これまで以上に介護人材が必要となることは言うまでもない。外国人ケアワーカーの育成及びスキルアップは、日本社会における重要課題の一つであると言える。

しかしながら、日本語教育の分野において、地域在住の外国人ケアワーカーを対象とした国家試験対策に関する先行研究は皆無に等しい。外国人ケアワーカーを対象とした研究は、外国人住民の介護技術習得と日本語学習に関する事例報告(末廣,2011)等がわずかに散見されるのみである。

日本語教育における介護福祉士関連の先行研究は、その多くがEPA候補者を対象としたものである。その例として、日本語研修のコースデザインに関する研究(登里他,2009; 登里他,2010)、国家試験の分野別使用語彙、頻出単語等の基礎データ作成(中川,2010)、国家試験受験に向けた漢字学習の効率化(中川他,2012)等がある。

これらの先行研究は、地域在住外国人に特有の問題を含んでいないという点で不足がある。その問題とは、地域在住外国人の多くは就労、結婚、家族の同行等のために来日し、長期にわたって日本で生活する中で日本語を自然習得し、学校等で体系的に日本語を学んだ経験がほとんどないことである。一方、EPA候補者は十分ではないにしろ、事前研修等において体系的に日本語を学ぶ機会があった学習者である。この両者の違い、地域在住外国人の特徴等を踏まえた研究が望まれる。

外国人ケアワーカーを対象とした先行研究が乏しい現状では、本稿は、国家資格の取得を目指す外国人ケアワーカーの学習支援及び指導等の道筋を示すものとして、有益な資料となると考える。

以下、2章で鈴鹿市社会福祉協議会と多文化共生市民活動団体「鈴とも<sup>3)</sup>」(以下、鈴ともとする)の共催により実施された「外国人ケアワーカーのための介護福祉士国家試験対策講座」の事例を報告する。3章でその活動を評価し、外国人ケアワーカーが国家試験の試験科目を学習する上で困難となる点を明らかにする。次に、4章で介護福祉士国家試験対策講座の具体的な改善案を提案し、外国人ケアワーカーに対する学習支援上の課題を導出する。

## 2. 平成 25 年度介護福祉士国家試験対策講座の事例報告

### (1) 介護福祉士国家試験対策講座、開講の経緯

鈴鹿市社会福祉協議会では、第 2 次地域福祉活動計画（平成 22～26 年度）の策定時（平成 21 年度）に市内におよそ 9,000 人<sup>4)</sup>いた外国人住民との共生について協議するため、専門部会を設置することにした。その部会には日系ブラジル人も参加し、まちづくりの当事者として日本人と共に「誰もが住みやすいまちづくり」について話し合った。その結果、多文化共生に関する活動計画が、第 2 次地域福祉活動計画の中に盛り込まれ、その事業を推進するための母体組織として鈴ともが結成された。

さらに、多文化共生事業を効果的に推進すべく、日本人と地域在住外国人の生活意識を把握し、多文化共生に関する地域福祉課題を抽出することを目的として、鈴鹿市内に居住する日本人、外国人（ブラジル人）を調査対象とし、「鈴鹿市における多文化共生に関する意識調査」（平成 22 年 11 月～平成 23 年 5 月）を実施した<sup>5)</sup>。この調査結果に基づき、鈴ともは、外国人ケアワーカーのための介護福祉士国家試験対策講座をはじめ、地域在住外国人との共生を目指した様々な活動を行っている。

他方、平成 23 年 11 月から 12 月にかけて、介護講座「介護ヘルパー・アミーゴ教室」（全 4 回）が開催された。これは、鈴鹿市社会福祉協議会と鈴ともとの協働によるもので、すでに介護職に就いている外国人ケアワーカー（ホームヘルパー 2 級取得者、取得中も含む）の介護技術や介護知識等のレベルアップを目的とした実践的な内容の講座であった。

この講座にブラジル、ペルー、ボリビア出身の外国人ケアワーカー 20 名が参加し、この講座参加者の中から「介護福祉士の国家試験の勉強がしたい」という要望が出された。そこで、平成 25 年 4 月より介護福祉士の国家資格取得を目指す外国人ケアワーカーに対し、国家試験対策講座が開講されることとなった。

### (2) 平成 25 年度介護福祉士国家試験対策講座の概要

外国人ケアワーカーのための介護福祉士国家試験対策講座（以下、本講座とする）は、国家試験の受験を希望する地域在住の外国人ケアワーカーに対し、試験科目の講義や模擬試験等を行うことを通じて介護福祉士の国家資格取得を支援するものである。筆者は平成 23 年 12 月より鈴ともに参加し、本講座には講師補助スタッフとして関わった。

平成 25 年度の受講者は 23 名であった。受講者の出身国の内訳は、ブラジルが 18 名、ペルーが 2 名、フィリピンが 2 名、韓国が 1 名である。受講者のほとんどが女性で、男性は 1 名（フィリピン）だった。また、受講者 23 名のうち 10 名が前述の「介護ヘルパー・アミーゴ教室」の参加者だった。

表 1 に本講座の募集要項を示す。

表1 平成25年度介護福祉士国家試験対策講座【募集要項】

講義日程・時間	平成25年4月～平成26年1月 第2・4土曜日 13:00～16:00
場 所	鈴鹿市社会福祉センター内 会議室
講座の内容	介護福祉士国家試験の試験科目の講義（18回） 介護福祉士国家試験の模擬試験（2回）
対 象	・平成26年1月に介護福祉士国家試験を受験する人 ・将来、介護福祉士国家試験を受験予定の人
定 員	20名程度
受講料	20,000円（テキスト代10,000円を含む）
テキスト	『外国人のための介護福祉士国家試験対策』（全4巻） 一般財団法人 国際交流&日本語支援Y編著
主 催	社会福祉法人 鈴鹿市社会福祉協議会 鈴とも（多文化共生市民活動団体）
講 師	鈴鹿市社会福祉協議会及び鈴とも所属の社会福祉士、 介護福祉士、介護支援専門員、看護師など

国家試験の筆記試験<sup>6)</sup>は、「人間と社会」、「介護」、「こころとからだのしくみ」の3領域に分かれ11科目あり、それに総合問題（3領域の知識や技術について横断的に問う問題を事例形式で出題したもの）を加えたものが試験科目となる。本講座の講義回数配分は、国家試験の実施機関が公表している試験科目別出題基準及び出題予定数に鑑み、「人間と社会」を3回、「介護」を9回、「こころとからだのしくみ」を6回とした。表2に講義スケジュールを示す。

講師は鈴鹿市社会福祉協議会の職員及び鈴ともメンバーのうち、社会福祉ないし看護・介護分野の有資格者（社会福祉士、介護福祉士、介護支援専門員、看護師等）10名が順に務めた。具体的には、「人間と社会」の講義は社会福祉士、「介護」は介護福祉士及び介護支援専門員、「こころとからだのしくみ」は看護師が担当することとした。講義はテキストに沿って進め、できるだけ「やさしい日本語」<sup>7)</sup>で具体例を挙げるなどの工夫をし、わかりやすく解説するよう努めた。

介護分野等の資格を持たない鈴ともメンバーは、講師補助及び運営スタッフとして各回少なくとも2名以上が参加し、受講者の受付（出欠確認）や受講者の質問に対する個別対応などを担当した。講師補助スタッフは、教室の後方で講義を聴きながら受講者の様子を観察した。受講者が講師の指示や言葉などがわからず困っているようであれば、その人のもとへ行き、小声で個別に説明するなどの対応をし、講義内容が理解できるよう援助した。

表2 平成25年度介護福祉士国家試験対策講座【講義スケジュール】

回	日にち	講義内容	回	日にち	講義内容
1	4/13	人間と社会1	2	4/27	介護1
3	5/11	こころと体のしくみ1	4	5/25	介護2
5	6/8	こころと体のしくみ2	6	6/22	介護3
7	7/13	人間と社会2	8	7/27	介護4
9	8/10	こころと体のしくみ3	10	8/24	介護5
11	9/14	こころと体のしくみ4	12	9/28	介護6
13	10/12	人間と社会3	14	10/26	介護7
15	11/9	こころと体のしくみ5	16	11/23	介護8
17	12/14	こころと体のしくみ6	18	12/21	介護9

開講当初から国家試験に合格するためには、講座を受けるだけでは十分でなく、自分で予習や復習などをしっかりすることが大事だと説き、自宅での学習を促した。毎回、講義の終了時には、次回の予習ができるよう講義範囲を告知した。

受講者に自宅でも勉強してもらうため、また、国家試験の出題形式に慣れてもらうため、副教材として練習問題を作成した。練習問題は国家試験の過去問題や市販の予想問題集などから、その日の講義内容に合ったものを抜粋し、受講者の学習負担を少しでも軽くするため、漢字にはすべてふりがなをつけた。

5月からはほぼ毎回、こうした練習問題を宿題として受講者に課し、次回の講義開始時に提出させた。提出された宿題は、講師補助スタッフが講義時間中に採点し、点数を記録した。講義終了時に、解説付きの解答をつけて採点した宿題を返却し、次の宿題を配付する。これを講座期間中、13回にわたって定期的に行った。宿題を提出できなかった受講者には解答を渡し、練習問題ができたときに自分で答え合わせをし、間違えたところは解説を読み、知識の確認をするよう指導した。

こうした通常の講義及び指導に加え、模擬試験を2回行った。1回目は平成25年11月3日、2回目は12月1日であった。両日とも、午前(9:00~12:50(休憩を含む))に模擬試験を行い、スタッフが答案を採点后、午後(13:40~16:00)から模擬試験問題の解説を行った。

本講座の講義は12月末に終了するが、翌年1月26日に国家試験があるため、1月の土曜日に自主的な受験勉強の場として教室(鈴鹿市社会福祉センター内会議室)を開放した。ただ勉強の場を提供しただけでなく、鈴ともメンバーでもある鈴鹿市社会福祉協議会の職員3名が、受講者の質問等に応じられるようにした。

以上、本講座の概要及び取り組みについて報告した。次章では、本講座の取り組みを評

価する。

### 3. 平成 25 年度介護福祉士国家試験対策講座の評価

#### (1) 受講者の介護福祉士国家試験合否結果

本講座における受講者 23 名の延べ出席回数は 296 回（全体で 414 回）、出席率は 71.5% であった。皆出席の受講者も 2 名いた。

23 名の受講者のうち 18 名が第 26 回介護福祉士国家試験（平成 26 年 1 月 26 日実施）を受け、同年 3 月 27 日に 1 名が合格した。18 名中 1 名の合格者は一般的には良い結果ではないが、受験者が日本語を母語としない外国人であることを考えれば、好成绩と言えるのではないかと。また、本講座の開講は、講師や講師補助及び運営スタッフの誰にとっても初めての経験で、戸惑うことも多かった。だが、たとえ一人でも合格するようにと努力してきた。その 1 回目の講座において、合格者 1 名を出せたことの意義は大きい。

#### (2) 勉強お疲れさまパーティーにおける受講者の声

本講座終了後（平成 26 年 3 月 8 日）に「勉強お疲れさまパーティー」（以下、お疲れパーティー）を企画した。これは料理やお菓子などを食べながら、およそ 1 年にわたって共に勉強した受講者同士が互いの努力をねぎらい、講師と楽しく語らうための会であった。講座開催者としては、そうしたかしまらないおしゃべりを通じて、受講者の率直な意見や感想などを聴取するという狙いもあった。

結果、6 名の受講者から話を聞くことができ、本講座について概ね肯定的に評価していることが分かった。受講者の声を大別すると、①本講座の利点と感謝、②受講者の自らに対する反省、③国家試験の難しさの 3 点となる。これらの声から、受講者たちが自宅では家事や家族の世話などに追われ、なかなか勉強することができず、本講座に通うことで自らの学習時間を確保していたことが分かる。加えて、本講座がこうした受講者たちの学習基盤、ペースメーカーとなっていた様子がうかがえ、受講者にとって意義深いものであったようである。

以下に、受講者の意見・感想等を簡潔に記述する。

##### ①本講座の利点と感謝

- ・ 講師がわかりやすく楽しい雰囲気です。講義し、優しく質問に答えてくれて嬉しかったです。
- ・ 自分の住んでいる市には同じような講座がないので、遠い所から通っていた。
- ・ 今年の試験がダメだったら、来年も参加したい。
- ・ 来年国家試験を受験できるようになる職場の友人にこの講座を紹介したい。

## ②受講者の自らに対する反省

- ・ 講座では勉強するが、自宅では仕事や家事で疲れてあまり勉強できなかった。
- ・ 宿題を出せないことが何度かあった。家でゆっくり勉強する時間が取れなかった。
- ・ 仕事が忙しく、欠席してしまうことが多かった。

## ③国家試験の難しさ

- ・ 一年間、講座に参加することができて良かったが、国家試験は難しかった。
- ・ 国家試験は難しく、自信を持って解けたのは少なかった。
- ・ 福祉制度や医療の分野を理解するのが難しかった。
- ・ 漢字の読み書きができないことが多かった。

## (3) 受講者の学習状況

ここでは、講座期間中における受講者の学習状況等について述べる。受講者は、介護の仕事のシフトを調整しながら本講座に通っていたが、授業中に居眠りや私語をすることはなく、非常に熱心に講義を受けていた。しかし、一方であまり芳しいとは言えない状況も見受けられた。これについて3点指摘したい。

一つめは、宿題の提出状況である。本講座では5月から11月までの間、受講者にその日の講義内容に関する練習問題を宿題として課していた。その宿題の提出率は、全体で42.1%<sup>8)</sup>と低かった。

宿題開始当初から、宿題を提出する受講者はある程度決まっており、5月から8月までは15名ほどの特定の受講者に限られた。ほぼ毎回宿題を提出する受講者グループ11名の提出率は、88.6%だった。しかし、9月以降になると、宿題を提出する者が一気に少なくなり、ほぼ毎回宿題を提出する受講者グループでも、提出率は54.5%に落ち込んだ。講座期間を通じてコンスタントに宿題を提出した受講者は5名だが、この5名の提出率は90.8%だった。反対に、一回も宿題を出さなかった受講者は8名いた。

9月以降、なぜ宿題の提出率が低くなったのか、その原因を明らかにすることは難しい。だが、原因の一つとして、開講5カ月を過ぎ、お盆休みなどの煩雑な時期を経て、学習のペースが乱れてしまったことが推測される。あるいは、受講者は働きながら勉強しているため、宿題をする気はあってもできなかったのかもしれない。いずれにせよ、宿題を出せない受講者には、何らかの手当てや工夫が必要であった。

二つめは、模擬試験の受験状況である。本講座では模擬試験を2回行ったが、その実施日が講義スケジュール以外の日であったためか、受験する者が少なく（1回目が13名、2回目が4名）、解答の正答率も、どちらも平均で20%ほどとあまり良くなかった。ちなみに、最高得点者の正答率は50~60%ほどであった。

通常、国家試験の模擬試験は1回につき6,500円前後の受験料が必要となるが、本講座

の場合、2回とも無料だった。よって、費用の問題ではなく、受講者の意識の問題だと言える。模擬試験は国家試験の予行演習になるばかりでなく、受験番号の記入の仕方、マークシートの塗り方など、日本の試験形式に不慣れな受講者のやり方では、不備となってしまう例を事前に見つけ、正すことができる。そのためにも、こうした機会をうまく活用してほしかった。また、講師及び講座スタッフも模擬試験の利点をもっとよく説明し、受験を勧めるべきだった。これは講座開催者側の反省点でもある。

三つめは、1月に受験勉強のために開放した教室の利用が全くなかったことだ。教室の利用が皆無だったからと言って、自分で勉強していないとは言い切れない。だが、おそらく多くの受講者は、勉強しなければいけないと思いつつも勉強してはいないだろう。このことから、自律的な学習の遂行が難しいことがうかがえる。つまり、勉強しない（勉強できない）のは、受講者が自分で学習課題を見つけ、計画を立て、学習を進めるという能力ないしスキルに欠けるからだと考えられる。

#### (4) 受講者に対する聞き取り調査（平成26年9-10月）

ここでは、平成26年9月から10月に筆者が受講者に対して行った聞き取り調査の結果を報告する。

現在、2回目となる平成26年度介護福祉士国家試験対策講座が開講中である。その受講者数は16名だが、そのうちの10名が昨年度からの継続受講者である。

筆者は今年度も講師補助スタッフとして授業に参加し、休憩時間等を使って継続受講者4名（日系ブラジル人）に話を聞いた。継続受講者から話を聞くにあたり、筆者は予め質問項目<sup>9)</sup>を作成し、半構造化インタビューを行った。但し、柔軟に話を聞くため、受講者に質問項目を見せることはせず、また、堅苦しくならないよう配慮した。2年目の受講者なので筆者とは顔見知りでもあり、あくまで休憩中の雑談のように自然な流れで話を聞いた。その結果、次の5点が明らかになった。

- ① 自宅ではほとんど勉強できず、講座の授業時間が勉強時間であること。
- ② 1年目より2年目のほうが講師の話がよくわかり、講義内容も理解しやすいこと。
- ③ 日本に長く（12～23年）住んでいるが、長い間、日常生活でも職場（工場等）でもポルトガル語でやっていけたため、日本語を勉強するようになったのは、介護職に就いてからか、国家試験の勉強を始めてからだということ。
- ④ 自然習得により日本語を獲得し、日本語学校等で体系的に学んでいないため、言葉の意味や漢字の読み方が分からないときは、日本育ちの子どもや身近な日本人（息子の嫁、職場の同僚、介護サービスの利用者など）に聞いていること。
- ⑤ 日常会話には不自由しないが、国家試験の学習において漢字の言葉で苦労しているこ



と。例えば、「褥瘡」という語は、まずは漢字の読み方「じょくそう」、次に意味（日本語→ポルトガル語）を調べる。言葉によっては、ポルトガル語の意味（ポルトガル語→ポルトガル語）を調べなければならない場合もある。さらに、「褥瘡」が既知の日常的な語である「床ずれ」と同義であることを覚える。

本講座以外では自分で勉強するのが難しいことや、講座が学習基盤になっていることは、受講者の学習状況からもうかがえたことだった。筆者による聞き取り調査でも、同様のことが確認された。

また、受講者がテキストの漢字や言葉などで苦勞していることは、授業中の観察からも見て取れることであったが、聞き取りによりその困難さが具体的になった。これは日系ブラジル人の継続受講者から聞いた話だが、おそらく他国出身の受講者も同じような悩みを抱えているだろう。両者に共通しているのは、外国語学習として日本語を体系的に学んだ経験がないということである。

以上、本講座の評価において、本講座が受講者の学習基盤となっていること、受講者が自宅等で自律的に学習を進めることが難しいこと、講座以外に勉強時間が確保しにくいこと、国家試験の受験勉強において漢字や言葉で苦勞していることなどを見た。次章では、これらを踏まえ、本講座の改善案、外国人ケアワーカーに対する学習支援上の課題を述べる。

#### 4. 介護福祉士国家試験対策講座の改善案、学習支援上の課題

本章では、学習者オートノミーの育成とエンパワーメントの観点から、まずは本講座の改善案を3つ提案したい。(1)-1)でコースデザインの見直し、(1)-2)で漢字学習の支援、(1)-3)で学習方法の指導について述べる。

次に、外国人ケアワーカーに対する学習支援上の課題を2つ挙げる。(2)-1)で外国人ケアワーカーを支えるしくみづくり、(2)-2)で外国人ケアワーカーに対するエンパワーメントについて述べる。

##### (1) 本講座の改善案

###### 1) コースデザインの見直し

一つめは、コースデザインを根本的に見直すことである。本講座の講義スケジュールは、講師が有職のボランティアであることから、受講者の学びやすさよりも講師手配の都合<sup>10)</sup>を優先したものになっている。しかし、受講者の学びやすさを第一に考え、より学習効率の高いコースデザインに変更すべきだろう。

中川他（2012）は、EPA 候補者が国家試験に向けて専門科目を学ぶ場合の適切な漢字学

習順序を提案する研究において、国家試験旧カリキュラムにおける13科目を、①科目間の内容の関連性、②科目内容の介護現場への近さ、③科目内容の具体性という3つの観点から考察し、学習の負担が小さい国家試験科目学習順を選定した。これによると、介護系科目群が最も学習の負担が小さく、次いで医学系科目群が続き、制度系科目群が最も学習の負担が大きいとされる。

国家試験は平成23年度(第24回)より新カリキュラム(3領域11科目)に変更されている。中川他(2012)を参考にすると、新カリキュラムの3領域では「介護」「こころとからだのしくみ」「人間と社会」の順で、受講者が理解しやすく、学習負担が小さいと考えられる。よって、本講座の講義順序は、以下のように変更するのが望ましいだろう。

1. 講座前半:「介護」領域の科目群(介護現場に近く、内容が具体的な科目)
2. 講座中盤:「こころとからだのしくみ」領域の科目群
3. 講座後半:「人間と社会」領域の科目群と「介護」領域の一部の科目(介護現場から遠く、内容が抽象的な科目)

「人間と社会」領域の科目群は社会制度や学術的な概念等をはじめ、受講者に馴染みが薄く、覚えなければならないことが多いので、国家試験にできるだけ近い時期に集中して学習するのが効率的だと思われる。また、「介護」領域であっても、日本における介護の歴史や介護問題の背景、社会福祉士及び介護福祉士法などについては、講座の後半に学ぶのが得策だろう。講師のスケジュール調整等がより厳しくなるかもしれないが、やはり受講者の学びやすさや学習効率等を最優先にしたコースデザインにすべきだ。

## 2) 漢字学習支援

二つめは、本講座の指導項目に漢字学習を追加し、支援することである。前章(4)で見たように、受講者は漢字や言葉で苦労しているため、漢字の学習方法を含めて指導するのが良いだろう。しかし、講義スケジュールの中に、新たに漢字や言葉を学ぶ時間を設けるのは難しい上、受講者の漢字能力は個人差がある。したがって、漢字学習支援は教材の提供を中心とした個別対応とし、初期の段階では、受講者によっては漢字の学習の仕方も指導する必要があるだろう。学習方法が分かれば、自分で勉強できるようになるため、無理なく自宅での学習に誘導できるのではないか。また、こうしたことは、3)で述べる学習者オートノミーの育成につながると思われる。そのためには、学習者がいつでも利用可能な漢字学習教材を作成し、用意しなければならない。

先行研究においては、EPA候補者が国家試験の専門科目を学ぶ場合の適切な漢字学習順序が提案されている(中川他,2012)。また、二漢字語(専門用語の構成要素となっている漢字二字からなる熟語)を媒介とすれば、専門用語の学習の効率化が期待できる(中川,2012)という。これらの研究では、EPA候補者がすでに日本語能力試験旧3・4級レベルの漢字

を習得済みであることが想定されている。だが、本講座の受講者の場合、そのレベルに達していない人も少なくない。よって、先行研究の知見を参考にしつつも、日本語能力試験旧3・4級レベルの漢字もある程度カバーした漢字学習教材を作成すべきだ。

### 3) 学習方法の指導

三つめは、受講者に対して学習方法を指導することである。受講者の多くは自宅ではほとんど勉強していない（勉強できない）ということであった。確かに仕事や家事等で忙しく、勉強時間が取れないということもあるだろうが、それ以前にどうやって自分で勉強したらよいか分からないようだ。したがって、普段自分で勉強するときのやり方や学習計画の立て方などを指導する必要がある。

青木（2001）は、学習とは最終的には学習者本人がしなくてはいけないことであり、何かを学ぼうとする時に自分の目的に適した学校等があるとは限らないため、自分の学習について自分で決め、実行する能力を持っていることは大切だとしている。こうした能力は「学習者オートノミー」と呼ばれるが、これは本講座の受講者に必要なものである。なぜなら、来年度以降も講座が続くという保障はないし、指導者がいつも身近にいるとは限らないからだ。したがって、国家試験に合格するために試験までの学習計画を立て、学習方法を選び、それを実行する。必要があれば、それを修正するといったことが自分でできるようにならなければならない。

しかし、学習者オートノミーを行使した学習は最初からはできない。何らかのサポートが必要である。まずは、学習内容や学習方法等について受講者と話し合うことから始め、教材を提供して学習の進め方を教示する。その後は、学習が順調に進んでいるかどうか見守り、声をかけ、必要があれば助言をする。こうしたことを通じ、徐々に受講者が学習の目標設定、計画、実行、評価といったサイクルを自分でできるように誘導していきたい。

学習者オートノミーの育成においては、学習者が学習のリソースにいつでも容易にアクセスできることが重要である。本講座においては、2)で述べた漢字学習教材や宿題として作成した練習問題が学習のリソースとして活用できるだろう。教材提供をベースとした個別対応を通じて、受講者の学習指導、ひいては学習オートノミーの育成が可能なのではないかと考える。

## (2) 外国人ケアワーカーに対する学習支援上の課題

### 1) 外国人ケアワーカーを支えるしくみづくり

一つめは、外国人ケアワーカーを社会全体で支えるしくみをつくるために活動することである。前述したように、外国人ケアワーカー向けの国家試験対策講座が今後も継続的に開講される保証はない。仮に続いたとしても、講座は必ず修了する。そのときに講座関係

者以外にも、外国人ケアワーカーを支える人々がいれば心強い。そのために、鈴とものような団体が地域の介護事業所等へ働きかけ、外国人ケアワーカーを支える輪を本講座から外国人ケアワーカーの職場、同僚などへ広げられたらいいだろう。

また、鈴鹿市社会福祉協議会及び鈴ともには、外国人ケアワーカーの労働や学習を支援するためのノウハウや経験等がある。必要があれば、外国人ケアワーカーを抱える介護事業所等にノウハウ等を提供することも可能だろう。今後は外国人ケアワーカーの後方支援のために、介護事業所等と連携することも必要なのではないか。そのためには、介護事業所等の現状や悩みなど把握しなければならない。

## 2) 外国人ケアワーカーに対するエンパワーメント

二つめは、外国人ケアワーカー（受講者）に対するエンパワーメントである。

筆者は、継続受講者に対して聞き取り調査を行ったが、その中で受講者が自らの日本語学習歴をあまり語りたがらないという印象を受けた。何年も日本に住んでいるのに日本語に自信が持てないこと、日本語教育における初級レベルの漢字も読めないことなどを引け目に思っているようだ。また、忙しくて勉強する暇がなかったと言いながらも、これまでほとんど日本語を勉強してこなかったことを後悔している。あるいは、恥じているようにも見えた。

こうした人たちを支援する際は、その人の複雑な心情や家庭の事情等に配慮しつつ「これから頑張ればいい」と温かく励ましていきたい。そして、「今やろうとしていること（例えば、国家試験に挑戦すること）は、非常に価値のあることだ」という肯定的な感情を、まず支援者が強く持つべきだろう。なぜなら、支援者をはじめとする周りの人々が受講者のやる気や学習の意義を肯定することは、受講者の力になるはずだからだ。

また、学習支援の間には熱心に支援すればこそ、支援者が、受講者の受験勉強に対する姿勢と日本人のそれとを比較し、時に「気合が足りない」などと受講者に対し、批判的な感情を抱くこともあるかもしれない。だが、こうした文化の違いを乗り越え、受講者一人一人の考えや姿勢などを認めることもエンパワーメントにつながると考える。

## 5. おわりに：今後の課題

本稿では、鈴鹿市社会福祉協議会と鈴とも共催による平成25年度介護福祉士国家試験対策講座の事例を報告、評価した上で、学習者オートノミーの育成とエンパワーメントの観点から、本講座の改善案と外国人ケアワーカーに対する学習支援上の課題を導出した。

これらを踏まえ、今後の課題は2つある。一つは、受講者（外国人ケアワーカー）の漢字学習及び学習者オートノミーの育成に貢献すべく、漢字・語彙の学習教材を作成することだ。こうした学習教材を作成し、蓄積しておけば、講座が開催されなくなった後でも、

教材の提供及び個別指導の形で学習支援を続けることができる。

もう一つは、外国人ケアワーカーを取り巻く職場環境や諸事情等を把握するため、実態調査をすることだ。現在、鈴ともでは、鈴鹿亀山地区広域連合内にある介護サービス施設及び事業所を調査対象とした外国人ケアワーカーの「雇用状況実態調査」を計画し、実施の準備を進めている。順調に行けば、平成26年11月には調査協力依頼書と質問紙を各施設及び事業所へ郵送する予定である。今後、その調査結果をもとに、外国人ケアワーカーを支えるしくみの構築及び地域の介護現場から推進する多文化共生について検討していきたい。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、鈴鹿市社会福祉協議会の渥美秀人氏、真弓和人氏、講座受講者の皆様に情報提供などのご協力をいただいた。ここに記して御礼申し上げたい。

## 注)

- 1) 平成20年度にインドネシア、平成21年度にフィリピン、平成26年度にベトナムから、年度ごとに外国人看護師・介護福祉士候補者の受入れが開始され、これまでに3国併せて累計2,377人が入国した（平成26年6月16日時点）。
- 2) 現在、介護職に従事する人は様々な資格（介護福祉士、介護職員初任者研修、旧ホームヘルパー1・2級など）で働いており、その職名は「介護士」「介護職員」「ヘルパー」等が一般的に使用されている。本稿では、その資格を問わず地域に居住し、介護現場で働く外国人を「外国人ケアワーカー」と呼ぶこととし、これにはEPA（経済連携協定）によって来日した「介護福祉士候補者」を含めない。
- 3) 鈴ともの構成メンバーは以下のとおりである（結成時から平成25年9月現在）。
  - ・外国人：ブラジル出身（日系人）8名、フィリピン出身1名
  - ・日本人：13名（鈴鹿市社会福祉協議会職員（事務局）7名を含む）日本人メンバーの多くが社会福祉や介護等の職に従事しており、その他は国際交流やまちづくりの関係者、大学講師（筆者）などが参加している。毎月1回（第3火曜日、19:00～21:00）定例会を開き、推進中の取り組みについて報告したり、今後実施する活動について計画案等を話し合ったりしている。
- 4) 鈴鹿市における外国人登録者数の推移は、鈴鹿市多文化共生推進指針検討委員会の第1回会議録（資料1）を参照されたい。

三重県による最新の統計資料（平成25年12月31日現在）によれば、鈴鹿市の外国人住民数は7,066人である。うち2,757人（39.0%）がブラジル人、1,233人（17.4%）がペルー人である。他の市町村と比較すると、南米出身の外国人住民で半数以上を占めることが鈴鹿市の特徴と言

える。

- 5) この調査にあたり、平成 22 年度に「鈴鹿市における多文化共生に関する意識調査検討委員会」が組織され、筆者は委員長を務めた。調査対象をブラジル人に限定したのは、注 4) で述べたように、鈴鹿市に居住する外国人はブラジル人がマジョリティ・グループであるため、ブラジル人の生活意識等を調査することにより、多文化共生に関する鈴鹿市特有の地域課題が抽出できるのではないかと考えたからだ。調査活動は地域の民生委員や自治会などの協力を得、外国人居住の多い地域と少ない地域の日本人 300 名、ブラジル人 300 名にアンケート用紙を配付し、後日回収した。この調査では、外国人ホームヘルパーに対する日本人の意識も調査したが、46.6%の人が「外国人のヘルパーで問題はない」と答えている。
- 6) 介護福祉士国家試験（筆記試験）の領域及び科目群、出題予定数は下表のとおりである。筆記試験の出題形式は五肢択一を基本とする多肢選択形式であり、210 分の試験時間で 120 問を解く。合格するには、10（①と④で 1 科目、②と⑤で 1 科目、その他 8 科目）の科目群すべてにおいて得点がなければならない。なお、国家試験には筆記試験だけでなく、第二次試験として実技試験があるが、介護技術講習会修了者は免除される。

科目群（出題予定数）		総問題数
領域	人間と社会	16
	① 人間の尊厳と自立 (2)	
	② 人間関係とコミュニケーション (2)	
	③ 社会の理解 (12)	
領域	介護	52
	④ 介護の基本 (16)	
	⑤ コミュニケーション技術 (8)	
	⑥ 生活支援技術 (20)	
	⑦ 介護過程 (8)	
領域	こころとからだのしくみ	40
	⑧ 発達と老化の理解 (8)	
	⑨ 認知症の理解 (10)	
	⑩ 障害の理解 (10)	
	⑪ こころとからだのしくみ (12)	
総合問題		12

（公益財団法人社会福祉振興・試験センターのウェブサイトを参考に筆者作成）

- 7) 日本語を母語としない者（外国人）は、どんな表現が理解しにくく、どんな表現を易しいと感じるのか。日本語母語話者がそれを的確に判断することは難しい。よって、本講座の開講にあたり、筆者は日本語教育の立場から外国人にとっての分かりやすさ、難しさについて簡潔にまとめた資料を作成し、講義担当者に配付した。

- 8) 宿題の延べ回数 299 回 (13 回×23 人) に対し、受講者全体の延べ提出回数は 126 回であった。
- 9) 質問項目は下表のとおりである。授業や学習支援などの参考にするために話を聞かせてほしいと継続受講者に説明してから、下表の順に関係なく、話の流れに応じて質問していった。受講者により聞けなかった (聞けなかった) こともあり、必ずしもすべて質問したわけではない。

滞日歴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いつ日本へ来たか</li> <li>・いつから鈴鹿に住んでいるか</li> </ul>
日本語学習歴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのぐらい勉強した (している) か</li> <li>・どこで、どうやって勉強した (している) か</li> <li>・日本語学校、教室などへ通ったことがあるか</li> </ul>
日本語能力について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常生活で、困ることがあるか。それは何か</li> <li>・職務上で、困ることがあるか。それは何か</li> </ul>
国家試験の勉強について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普段、どのぐらい勉強しているか</li> <li>・どうやって、何をしているか</li> <li>・難しいところは何か</li> </ul>
本講座について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どう思うか</li> <li>・何か要望はあるか</li> </ul>

- 10) 講師は一人で複数回、授業を担当した。その際、表 2 のように各月の 1 回目の授業と 2 回目の授業を分けて講義を組めば、例えば、介護を担当する講師は、月に 1 回講義を担当すればよい。有職のボランティア講師にとっては、連続で月 2 回講義を担当するより負担が小さいと思われた。

## 参考文献

- 青木直子(2001)「教師の役割」青木直子他(編)『日本語教育を学ぶ人のために』世界思想社, pp.184-199
- 青木直子(2005)「自律学習」日本語教育学会(編)『新版日本語教育事典』大修館書店, pp.773-775
- 齊藤真美・飯島有美子・越山泰子(2011)「EPA による外国人介護福祉士候補者の言語、非言語的背景—国家試験対策に向けての「学習者オートノミー」育成のため—」『関西国際大学コミュニケーション研究所 コミュニケーション研究叢書』第 9 号, 3-15.
- 多文化共生に関する意識調査検討委員会 (2011)『鈴鹿市における多文化共生に関する意識調査報告書』, 社会福祉法人三重県社会福祉協議会
- 登里民子・栗原幸則・今井寿枝・石井容子 (2009)「インドネシア介護福祉士候補者を対象とする初級からの専門日本語教育プログラム」『2009 年度日本語教育学会春季大会予稿集』176-181
- 登里民子・石井容子・今井寿枝・栗原幸則 (2010)「インドネシア人介護福祉士候補者を対象とする日本語研修のコースデザイン—医療・看護・介護分野の専門日本語教育と、関西国際センターの教育理念との関係において—」『国際交流基金日本語教育紀要』6, 41-176、国際交流基金
- 中川健司(2010)「介護福祉士候補者が国家試験を受験する上で必要な漢字知識の検証」『日本語教育』

147号, 67-81

中川健司・中村英三・角南北斗・齊藤真美 (2012) 「介護福祉士国家試験科目別出現漢字に関する調査」『JSL 漢字学習研究会会誌』4号, 19-28

中川健司 (2012) 「二漢字語を媒介とした介護専門用語学習の有効性—基礎医学術語との比較を通して—」『東京医科歯科大学国際交流センター紀要』第5号, 14-22

中川健司・中村英三・角南北斗・齊藤真美 (2012) 「介護福祉士候補者の国家試験受験に向けた漢字学習順序の提案」『東京医科歯科大学国際交流センター紀要』第5号, 23-36

堀永乃(2013) 「多様な介護人材の育成から多文化共生の持続可能な社会作りを目指す」『自治体国際化フォーラム』285号, pp.38-39

YOMIURI ONLINE 連載 「働かたち」 (4)外国人我が社の戦力

<http://www.yomiuri.co.jp/osaka/feature/CO005770/20140106-OYT8T00944.html>

(2014年10月13日閲覧)

青木直子 「学習者オートノミー、自己主導型学習、日本語ポートフォリオ、アドバイジング、セルフ・アクセス」『日本語教育通信』38号, 国際交流基金

<https://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/research/201003.html>

(2014年10月6日閲覧)

鈴鹿市多文化共生推進指針検討委員会 第1回会議録 (資料1)

[http://www.city.suzuka.lg.jp/gyosei/open/shiryu/shingi/gijiroku/datas/216\\_007.pdf](http://www.city.suzuka.lg.jp/gyosei/open/shiryu/shingi/gijiroku/datas/216_007.pdf)

(2014年10月18日閲覧)

三重県外国人住民国籍別人口調査

<http://www.pref.mie.lg.jp/TABUNKA/HP/data/gaitou/h25.12.31data.pdf>

(2014年10月18日閲覧)